
幼恋

金村春実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼恋

【Nコード】

N3704A

【作者名】

金村春実

【あらすじ】

和磨はある日隣に引っ越してきた晶に出会う。晶は実はとんでもない女の子で…？和磨と晶の切ない物語…。

プロローグ（前書き）

初投稿です（^^;）すごく下手ですが観てやって下さい。少し切ない物語にしたいなと思ってます。

プロローグ

ぼくは

君以上に

人を

愛せるのだろうか…

あの場所で…

君と描いたあの場所でそこで君を待ってる

君を思い出すことなんてない

忘れたことなんて一度もないから…

第一章 和磨

ぼくは今になって後悔した。

あのときなぜもっと知りたいと願わなかったのか。なぜ君のSOSを見逃してしまったのか…。

ぼくは子供だった。

時は13年前の春。ぼくの名前は坂下和磨。ぼくはまだ小学2年生だった。その日は暦では春だったが、まだ肌寒さが残り、雪も少し溶け残っていた。しかし雲の切れ目から太陽の光が射していて、植物達は皆生き生きしていた。なのに…なのにぼくの気分は最悪だった。それにはある理由が…。

ブロロロ…車の音がする。

「こっちでいいのか？」

「はやくもて！」

「バカ！そっちじゃない！！！」

休日の朝なのにやけに騒がしい。ぼくは布団の隙間から時計を見た。もう朝の九時だ。ぼくは昨日ミニバスケットクラブの試合があって、それで一夜開けた今日でもひどく疲れていた。体の通信機関が故障したみたいだ。その試合結果は27－62のボロ負け。ぼくの初試合だったから昨日はずっと泣いていた。うっ…思い出したらまた泣いてしまいそうだ…。

傷心に浸るのも束の間で、もっと嫌なことを思い出した。

そうだ…今日は

「おとなりさん」
が来る。

つまり隣に越してくる家族がいるのだ。

ぼくは当時アパートの一階に住んでいた。前の家はぼくの母さんと

父方の祖母との仲が猿と犬並に悪くて、仕方なく父さんは祖父母に家をゆずりここに引っ越すことに決めた。ぼくは

「おとなりさん」

に来てほしくない理由があった…。そしてこの出会いがぼくの人生を大きく狂わせることになろうとはまだ誰も知らない…。

第二章 嫌（前書き）

展開が遅くて申し訳ありません m
（^ ^ ; ） m 気長に待ってやって下
さい

第二章 嫌

ぼくがおとなりさんにきてほしくない理由は単純なことで、誰にも干渉されたくないという思いからだ。それにぼくと同じ年ぐらいの子も来るらしい…。ぼくは人といえるのは嫌いではないけれど時々苦しくなることがある。まあ兎に角

「干渉」

という行為は大嫌いだ。そう思うようになったのはあの頃からだけど…。

ピンポン…

玄関のチャイムが鳴った。ぼくは嫌な予感がしたので、すぐさま布団の中に舞い戻った。

「和磨く？和磨く！！起きなさい。隣に引越してらっしゃった方々がお見えになったわよ。」

予感的中。ぼくは出ていきたくなかったから狸寝入りをすることにした。しかし…

「和磨ー？和磨ー！！いい加減に起きなさい！あんたお客様がいらっしゃっているのにお母さんに恥をかかせるつもり！？」

あろうことか、母さんはぼくのドアを開けドカドカと足を鳴らしながら入ってきた。母さんはもの凄く気分を損ねていた。

クソッ…。ぼくだって気分は最悪なのに…。でもぼくは、

「ううん、お母さんに恥をかかせるつもりなんてないよ。起きるのが遅くなってごめんなさい。」

…そう言ってやった。これで母さんも少しは満足しただろう…。ぼくはこの時すでに、上っ面だけの関係というものを学んでいた。それは対立するよりも単に楽だからという感情と、「あきらめ」

という感情からだった。ぼくがこんな風になってしまったのは、そう…『あの頃』からだ。ぼくは、何か大切な物をおとしてきてしま

ったのだろう…。ぼくの大切なもの…。

「じゃあ早く着替えてきなさい。」

はっ…！ぼくは我に返った。今は

「良い子」

を演じないと…。

「今行きます。」

ぼくはすぐに着替えをし、部屋のドアを開け、玄関へと向かった。そこで待っていたのは意外な子だった。

第三章 女の子（前書き）

恋愛なのにいまだに恋愛っぽくない内容です：（^^；）本当に申し訳ないです（；|；）読者の皆様ごめんなさい m（|）m

第三章 女の子

そこにいたのはぼくの両親と夫婦らしき二人。それともう一人：ぼくと同年くらいの

「女の子」

がいた。

えっ：

ぼくは目を丸くした。ぼくはてっきり

「男の子」

がくると思っていたから：。その時ぼくの脳裏に二文字の漢字が浮かんだ。

「最悪」

ぼくは女の子が苦手だ。前の家に住んでいた頃、ぼくは今とは違う学校に通^{かよ}っていた。私立の学校で、県内でも偏差値の高いところだったと思う。ぼくはそこでいつも学年トップだった。特に何もしなくても成績は結構よかったのだ。運動もできたし：まあ兎に角何でもできた。できないことなんてほとんどなかった。でも一つだけ苦手なものがあった。

「女の子」

なんだか知らないけどそこにいた女の子達は皆ぼくにこびを売るように話しかけてきていた。ぼくから見ると気に入られようとしているみたいだったけど：。ぼくはそれが嫌いだった。なんだか利用しようとしているみたいで：ぼく自体を見てくれないみたいで：。ぼくはその前からこういう状態だった。でも、この時こみあげてくる

「何か」

を心の奥に隠した。そして蓋をして二度と開かないように何十にもテープを巻きつけた。それが開きそうになるとまたはテープを巻き、また開きそうになるとまたはテープを巻く：。その繰り返し。ぼくはその

「何か」

を開けようとは全く思わなかった。むしろ何故か恐ろしくて怖くて……それが開かないようにするのに一杯一杯だった。今もそれは続いているけど……。でも最近はそのが開く気配は全くない。ぼくは何故か哀しい。うれしいはずなのに……ぼくは本当はどうしたいのだろうか……。

「和磨……早くこっちへいらっしゃい。みなさんにご挨拶なさい。」
母さんは少し怒っていた。だが決して怒鳴ったりはしない。だってすぐ近くに

「おとなりさん」

がいるから……。どうせこの後、さっきの続きをするんだろうけど。
母さんは世間体を気にする。そういう人だ。

「遅れてしまつてごめんなさい。僕の名前は坂下和磨です。これからは宜しくお願いします。」

……これで母さんは満足しただろう。ぼくはそのあとおじぎもしてやった。

「しっかりとらっしゃいますねえ。」

おとなりさんの夫婦らしき人達が口々に母さんに言う。

「いいえ。そんなことないですよ。」

母さんは満足そうにそう答えた。ぼくが今まで成績上位、運動神経抜群でいつづけたのには理由がある。別にぼくはしなくて良いというのなら勉強なんてしない。スポーツだってサボる。けれどそれをしないとぼくの大嫌いな

「干渉」

が始まる……。つまりはそういうことだ。ぼくは今のアパートに暮らし始めてから公立の学校に通っている。（このアパートからは遠すぎて私立の学校に通えない）

「干渉」

の少ないところに……。それなのに

「おとなりさん」はやってきた。しかもぼくと同じ年くらいの子を

つれて……。それも

「女の子」

干渉の材料が増えた。ぼくは神を恨んだ。その時のぼくにとって彼女は

「邪魔な存在」

でしかなかった。

でも今は少しでもそう思ってしまった自分が憎くてならない……。

第四章 苛

「ほら、あんたもご挨拶して。」

その女の子は母親らしき女性に背を押され、少しばかり背伸びした。「隣に引越してきた水谷晶みずたにです。これから沢山迷惑をおかけしてしまうと思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。」

そのあと丁寧に頭を下げた。ぼくは母さんの顔を見た：あっけにとられたようだった。多分ぼくよりも礼儀正しかったからだと思う。ぼくは苛いらついた。ぼくに勝てる奴なんてそうはいない。でもこの

「晶」

って奴はこの時、母さんの頭の中で母さん独自の考える

「良い子」

の基準を満たした。ぼくよりもはるかに上の：つまりはぼくに勝ったのだ。母さんはすべて外側で決める。つまり中身なんて関係ないのだ。自分にまつわるものは全て上玉でないと気が済まない。そんな感じの人だ。

「：礼儀正しいお子さまですね：。」

苦笑：。母さんの顔はひきつった。

ああ：。また母さんにどやされる。母さんは今日の夜にでもぼくに嫌みをとばすだろう。

「干渉」

それは母さんの中では

「比較」

にもつながる。

はあ：。

心の中でため息がでた。いつからだろう：こんな風になったのは：。あああの頃からか：。嫌な思い出。

「和磨、晶ちゃんと三角公園で遊んでらっしゃい。水谷さんはお引越しのことでいろいろと忙しいと思うから。」

「いえ、そんな、悪いですよ。」

「そんなご遠慮なさらずに、和磨も暇でしたし…。」

はっ？ ぼくは暇どころか朝ご飯もまだ食べていない。外だってまだ雪解けが終わってないのに…。母さんはきっとこの『晶』って子を視界に入れたくないんだ。ぼくよりも上だから…。

ガタガタガタツ…

また蓋が開き始めた。ぼくは急いでそれを押さえ込む…。泣きそうになりながら必死でまたテープを巻き始める…。なんで泣きそうなのかは分からないけど…。もうどうでもいい…。良い子を演じるついでだ。ぼくが

「NO」

と言ったらどうせまたあの時のようになる。

「良いですよ。ぼく、晶ちゃんと遊びたいです。」

ぼくは言った。笑顔で。これで少しは母さんの機嫌も直るだろう…。

「私も…私也和磨くんと遊びたいです。」

突然そいつは話してきやがった。

おまえが言うな…。ぼくはかなり苛ついた。だけど…

「うん、行こう！」

ぼくは気持ちとは裏腹にとびきりの笑顔で答えた。そいつも う

ん と言。ぼくらはアパートから約50m離れた

「三角公園」

へと歩き出す。

この時ぼくはまだ知らない。そこでぼくの蓋が再び開き始めることを…。

第五章 涙

ぼくらは一分程度で三角公園に着いた。さすがに雪が残っているだけあってまだ息が白い。三角公園とはその名の通り三角形の形をしている。そこにはブランコと、木で作られた可愛らしい机とイスしかない。何の変哲もないところ…。ぼくはこの公園が好きだ。だってこの公園に来る人は数えるほどしかないから…。

「あそこに座ろうか」

ぼくは例の木の机を指さす。

「私ブランコが良いなあ。」

そいつは呟く。ぼくの苛つきはピークに達しそうだ。このわがまま女め…。さつきと感じが違うじゃないか。

ぼくらはブランコに乗った。ぼくはこのブランコも好きだ。だって空を見ながらこぐと空を飛んでるような気持ちになれるから。ぼくらは五分くらいお互い黙ったままブランコをこいでいた…

「ねえ…」

そいつが先に沈黙を破った。

「何？」

完璧な笑顔で返すぼく。

「あんた…なんでそんな無理して笑うの？」

「…」

ぼくは意外な言葉に驚いて声がでなかった。焦った。ぼくの完璧な仮面が見破られてしまった…。どうしよう…まず落ち着いて平常心を保たなきゃ…。じゃなきゃまたあの時みたいになってしまう…。

「無理してなんかいないよ」

ぼくはできるだけ平常心を装った。

「うそだ。」

そいつは言い返してきた。苛つく…。

「嘘じゃない。」

「絶対にうそ。」

「嘘じゃないってば。」

：

ぼくらは変な言い合いを始めていた。ぼくは焦りと共に苛立ちもつのらせていった…。そしてぼくの苛立ちは遂にピークをむかえる。

「違うって言ってんだろ！！うるさいんだよ！このわがまま女！最悪だ！」

ぼくは息が荒くなった。キレたことなんてほとんどなかったから…はっ！しまった…。

そう思ったときにはもう遅い。ぼくの仮面は完璧に全てはがれて落ちていた…。あの時の場面がぼくの中によりみができる。

最悪だよ…。ぼくは後悔した。

「そう…。それが聞きかったの。」

ぼくは驚いて晶を見た。晶は偽りのない笑顔でぼくにほほえんでいた。太陽の光がちょうど晶の髪に当たっていた。淡い茶色の長い髪が風になびいてた…。ぼくの眼から一粒の涙がこぼれた。

「ちよっ…なんで泣くのさ。」

ぼくの中で蓋がまた開き始めた。ガタガタと音を立てて。でもぼくはそれを押さえ込もうとはしなかった。

「うるさいなあ。分かんないけど出るもんは出るんだよ。」

言葉ががさつになる。

「ふーん。そうなの。じゃあ今の内出しとけば？」

晶は何事もなかったかのようにまたほほえんだ。

「そうしようかな。」

ぼくはそう言いながらなぜか笑った。晶も優しくほほえむ。二人の間になんとなく暖かい空気が流れた。

あの時君の手が少し震えてた。ぼくはそれに気づかないふりをした。ねえ…もし気づいていたこと伝えてたら

君は今も笑ってた？

第六章 開いた

ぼくは一通り泣いた後空を見あげた。雲一つない空が蒼々と広がっていた…。

なんで晶はぼくの気持ちに気づいたのだろう…。ぼくの胸になにか引っかかる物を感じた。

「ねえ…」

「なに？」

晶がぼくに再び話しかてきた。ぼくは晶に視線をやる。

「人ってね、見えないところでつながっているんだよ。」

「……。」

あまりにも唐突な晶の言葉にぼくは理解できなかった。晶はブランコから静かに降りてぼくに振り返る。さっきまでは晶のことが憎くて憎くてたまらなかったのに…。なぜか晶が可愛く見えた…。

「風を伝って、海を渡って、土を歩いて、空を見上げて…」

なんだろう…。よく意味が理解できないのに何故か晶の言葉がぼくを切なくする。晶の長いその髪はぼくの心を優しく撫でた。時折風が晶の髪に笑いかける。

「ぼく…よく分かんない。」

ぼくの口から自然に言葉が漏れた。今までは相手のほしい言葉を…偽りの自分を演じていたのに…。そうやって自分を守ってきたのに…どうして…？どうして自分で自分の盾を壊すんだ？

「フツ…。今に分かるわ…。」

晶は良く分からない笑みを浮かべた。哀しそうな嬉しそうな…。実際は分からない。けどそんな気がした。

だってぼくはもう…もう？…

「もう」

って何だろう。自分に問いかける。

「ねえ空をもう一度見てよ…」

晶は空を見上げた。ぼくもこの気持ちに名をつけれぬまま空を見上げる。

「ねっ。私たち空に包まれているでしょう？」

「えっ？」

「だあかあら、私たち同じモノに触れられているでしょ？」
ふふっ…と晶は笑いながら瞼をとじた。

「風は私に当たってあなたに当たる」

「此処が例えば海ならば、海は波を使ってあなたにあたる…その波は私にあなたの感触を運んでくれる」

「土はあなたの歩いた証を使って私の証と遭わせてくれる」

「……。」

「よく分かんないよ…。」

ぼくは何故かまた泣きそうだ…。晶がほえみながら何かをぼくに悟す。ぼくの蓋のテープがちぎれていく…

「つまりね！」

「つまり？」

ぼくは聞き返す。

ビリビリビリッ…

何十にも巻かれたテープがどんどん引きちぎられていく…。蓋は今にも開きそうだ。

言って…その先を…早く…

「君はひとりじゃないんだよ…」

ふわぁー……

ぼくの心の中で純白の羽が舞った…。緑の大海原が広がる…。蓋が開いた…

「君は君で良いんだよ…」

ぼくの眼から一筋の雫が流れ出た。あとからあとから…もう止まらない…。

「あ…きら…」

「また泣いちゃって…なに？」

「あり…ありがとう…」

ぼくは泣きじゃくった。泣きじゃくって顔をくしゃくしゃにしながら晶に疑問をぶつけた…

「な…なんで…ぼっ…ぼくの…仮面を…みつ…見破った…の？」

涙でにじんで見えなかったけどたぶん晶は苦笑いだった…。

「あなたは…和磨は私と似てたから…。」

「えっ？」

「あなたの瞳が私のと似てたから…」

「もしかして…」

ぼくは泣くのをやめてしまった…。晶は寂しそうに頷く。

「それじゃあ…晶も…？」

ぼくらは、二人ともずっと

「偽り」

を過ごしてきたのだった。今までずっと明るかった晶の顔が寂しそうな少女の顔へと変化していく…

「晶も泣いちゃえよ…」

自然とまた言葉が出た…。泣かせてあげたい…

「ふう…ふうええ…ん」

晶の大きな瞳から大粒の涙がこぼれた…。

晶もいろいろと無理してたんだな…。

ぼくはなんとなく晶を抱きしめた。柄にもなく…ただ抱きしめた。体が勝手に動いたんだよ。ぼくじゃなくて体が…

抱きしめながらぼくも泣いた…。蓋は開いたんだ。あとは…あとはなにをしたら…。

ぼくは蓋の中にまだ箱が残っているのを見つけた。鍵がついてる…
この鍵はどこにあるんだろう…。

ぼくは晶の心情を勝手にぼくと同じだと…まったく全て同じなんだ
と決めつけてた…。

馬鹿な自分…君が求めていたのはそんなものじゃなかったのにね…。
今、隣のブランコは誰もいないよ。風が虚しく揺らすだけ…ただそれ
だけ…。

第七章 鼓動

それからぼくらは仲の良い友達になった。それと互いに

「偽り」

という秘密を共有する仲にもなった。

ぼくは蓋が開いたことにとても驚いていた。

晶だから…だから？…

「だから」

ってなんだろう…？でも晶だから開くのを押さえ込もうとしなかったのかな…って思ってしまう…

なんだろう…晶の前では自然体でいられる…

この気持ちはなに…？

ぼくらは三角公園を後にした。なんだかお互いに涙を見せ合ってしまったことや抱き合ってしまったこと（正確にはぼくが抱きしめたんだけど…）などで、アパートまでの道のりはちょっとだけ気まずかった…。

それに初対面なのに…。初対面なのにどうして…。…そっか、晶もぼくと同じだからか…。ぼくは一人で納得した。

ぼくは、晶と

「共通」

するものが

「偽り」

以外にもある気がした。でもお互いにそこには触れなかった。何だかそこには触れてはいけないような気がして…触れたらまだ未完成なもの…

「何か」

が壊れてしまいそうで…。

ぼくらは家路を急いだ。一言も話さずに。でも手をつなぎながら…

晶の手はとても冷たかったけど、二人で握り合うと確かなものが感じられた。アパートの前まで来るとぼくは恥ずかしさからか急に手を引っ込めてしまった…。

「…」

晶は少し地面を見つめた…。その後ぼくを見て哀しげに笑うとさっさと歩いて自分の部屋へ向かった。晶の家族の引っ越しはとうの昔に終わっていたらしい。アパートは静まり返っていた…。ぼくはそれを黙って見届けた。

チクっ…

「うっ…」

ぼくの胸に何かが刺さるのを感じた。晶の後ろ姿を見ていて不意に切なくなった。さっきの晶の哀しそうな笑顔がぼくの中にかきめぐる…。

なんだろう…この気持ちは…

ぼくは変な切なさを感じた。そしてぼくもアパートの自分の部屋へと向かった。パターン…

玄関を閉めると同時にぼくの蓋も閉まった。緑の大海原がが焦げ茶色へと退化していく…。羽はどんどん真っ黒に…。

ドクンっ…ドクンっ…

鼓動が速くなるのを感じた。

ドクンっ…ドクンっ…

「お母さん…」

見上げると母さんが立っていた。

「和磨、ちよっといらっしゃい…」

そう言うとりビングへ向かった。ぼくも後続く。ぼくはまた蓋にテープを巻き始めた。ドカツと母さんはソファに腰をおろした。ぼくは母さんから見て真っ正面にあたるソファに腰をおろした…。

ぼくは急いでテープを巻き始める…

「ねえ和磨…」

「なに？お母さん。」

「晶ちゃんは礼儀正しかったわよねえ。」

「…そうだね…。」

「あああー。あんなに礼儀正しい子って羨ましいわよねえ…。」
母さんはそっぽを向きながらぼくに言う。

「…。」

「ねえ…母さんちょっと恥ずかしかったわあ。和磨はできる子だと思ってたのに…。」

「…。」

ぼくは俯いた。

はやく…早くテープを巻いて…早く…

また何十にもテープを巻きつけた。前よりもずっときつめに…

ぼくは母さんを見て反省してる素振りを見せた。

「ごめんなさい…お母さん。」

「今度からはもっと礼儀正しくなって、もっといい子になるからね！」

そこですかさず、これでもか！という笑顔を見せた。

「そう？お願いね…これ以上恥をかかせないでね。」

「はい。」

「分かりました。」

ぼくは蓋が全く開く気配がないのに…それなのにテープを巻き続けた。泣きながら…

「そうだ！和磨そういうばご飯まだよね？」

「うん…そうだけどまずいいや。後で自分で食べるよ。」

「そう？」

「うん。気を配ってくれて有り難う。」

…気を配っているのはどっちだろう…。そう思いながらぼくはぼくの部屋に戻った。そのやりとりを部屋の隅でお父さんは見ていた。だけど見ているだけで口出しはしない。普段は優しいのにも母さんの前ではだんまりだ。

お父さんはぼくのことどう思っているのかな：

そんなことを思うと決まってなんだか期待と不安が入り交じった空気にさせられる…。でも蓋が開きそうになるから言わない。

パタっ：

ぼくはベットに倒れ込んだ。また涙が出てきた…。晶が憎いわけじゃないんだよ：母さんの干渉には嫌気がするけど：でも母さんのことだって嫌いなわけじゃない：だけど：

ぼくは自分の気持ちに整理がつかなくて、やるせなさでいっぱいになった。偽りを演じることの苦しさを感じる。なのに：

晶の歳とか：前に住んでた場所とか聞いとけばよかったな：

そんな時なのにぼくは晶のことを考えてた…。ぼくは泣きながら、いつの間にか疲れて眠ってしまった。

あの時意地でも君のこと聞いとけば良かったね：

家路を歩くぼくらの頬はほんのり薄紅色で、なんだかもどかしかったよ：

今も冷たい小さな手の感触がぼくの心を締めつける。

第八章 正論

翌日の朝会でぼくのクラスに転校生が来た。その転校生は晶だ。つまり晶とは同じ年だったのだ。晶は昨日、ぼくに見せた少女の顔ではなく凛とした

「偽り」

の顔で自己紹介をした。クラスの連中は皆晶に見入っていた。それもそのはず。ぼくは昨日涙や苛つきのせいでちゃんと晶を見ていなかった。

長いサラサラの髪：大きな瞳：透きとおった肌：桃色の唇：華奢な体つき。

どこを見ても晶は綺麗だ。ファッション雑誌に載っていてもおかしくないくらい。どうしてぼくは気づかなかったのだろう：視力の問題だろうか？はたまた心の問題なのだろうか？

そんなことを思いながら晶から視線をずらし窓の向こう側を見た。雪はまだあるけど：

もう三学期も終わりだな：来月から三年生か：

外の雪を見てそうも思った。ここでふと疑問が湧いた。何故晶はこんな中途半端な時期に転校してきたのだろうか？進級の来年度からの方がきっぱりしていて良いと思うけど：まあいろいろとあるんだろうけどなあ：

その日学校にいる間は晶とは話さなかった。一言も。晶は頭が良いらしい。ぼくもそうだが晶と話してしまえば周りにボロがでる可能性がある。晶はそれを理解しているらしかった。ぼくは少し嬉しかった。今までそんな風に気を使ってくれる友達なんていなかったし、そもそも友達と呼べる人もいたかどうかだったし：でもそうなくてしまったのは…………

ぼくは考えるのをやめた。記憶がよみがえらないうちに。

学校からの帰り道ぼくは三角公園に寄り道をした。最近をよくここ

に来る。ブランコに乗っていると晶が来た。晶も学校帰りらしい：ぼくを見つけると笑顔になって走ってきた。ニコツとえくぼを見せつけてぼくの隣のブランコに座った。

「よっ！」

「どうも……」

「和磨くん素っ気ないですねえ」悪戯っぽく笑う君……

「そんなことないよ」

ぼくはなんとなくいつもの癖で笑顔を作った。晶は怪訝けげんそうにぼくの顔をのぞきこむ……

「和磨……私の前では無理なんてしなくて良いからね？」

晶はすぐにぼくの仮面を見破った。

それでも晶はいてくれるから……いなくなりはないから……だからぼくはすぐに偽りをやめることができた。

晶を見ていて気づいた。そういえばいつの間にか蓋が開いてる。ぼくは頑かたくなに拒んでいた蓋を晶の前では自分から開けられることに気づいた。

「……気遣ってくれてありがとう……」

また自然に言葉が出た。

「ぼくのこと頼ってくれて良いから……」

そう言ったぼくを見て晶は少し戸惑ったように見えた。有り難うと言言うと晶は話題を変えた。

「ねえ……この町に図書館ないの？」

「あるよ。ぼくらの家のすぐ裏だよ」

ぼくは晶の戸惑いを気にもとめなかった。

「へえ……知らなかった」

「まあ他の町のと比べると小っちゃいし人もあんまり来ないからね」「ふうん……」

「晶興味あるの？」

「うん。私本好きなの」

「小説とか？」

「ううん。絵本を読みたくて…」

ぼくは驚いた。もう三年生になるのに未だに絵本を読みたいとか…ありえない。

「晶って…意外と子供っぽいな。なんか思ってたのと違うんだけど…」

ぼくは少し見下したように言ってしまった。第一ぼくは子供っぽいのが好きじゃない。上へ上へと進まないといけない理由が母さんとぼくの中にあっただから…。

「和磨ってひどいんだね」

「…えっ？」

今度はぼくが戸惑った。晶は少し怒ってるらしい。

「なんで怒ってんの？」

ぼくはなんで晶が怒っているのかまるで理解できない。晶は、はあ…とため息をついた。

「和磨…そういうのなんて言うか分かる？」

「…」

「『偏見』って言うんだよ」

「偏見？」

「そう、偏見…かたよった見方をするっていうことだよ」

「かたよった見方？」

「和磨は私が絵本を好きな馬鹿にしたでしょ？それは和磨の基準で考えているだけで私の基準とは異なるの」

「…」

「十人十色ってことわざがあるんだけど本当にそれで十人いれば十通りの考え方や価値観の違いがあるの」

「だから見下すのはやめなよ…ね？」

晶は怒りつつも優しく丁寧に教えてくれた。それを聞いていてぼくは思った。…それじゃあぼくも母さんと似たり寄ったりじゃないか…ぼくは自分を恥じた。でもそれ以上に自分の非を認めたくないぼくがいた…そして正論を他人に言われたことに腹が立った…

「なんか…苛つく」

「…え？」

「晶って綺麗ごと言うの上手いんだな」

「綺麗ごとじゃないよ…事実を言ったただだよ」

また正論。

「今日は帰るわ」

ぼくは公園を後にした。この時は何に苛ついていたかよく分かんなかった。多分、今まで偽りでいた分否定されたこと少なかったからだと思う…。

家に帰ると自分のベットに倒れ込んだ。

苛つく…晶も苛つくけど…こんな自分にも腹が立つ…なんで認められなかったんだろ…晶は悪くないのに傷つけてしまったかもなあ…とにかく全てに苛ついていた。ぼくはベットの片隅にあるティッシュ箱を投げ飛ばした。

…その日の真夜中ぼくは部屋をこっそり抜け出して三角公園へ向かった…手が震える寒さだったけどそこに行きたかった。どうしてもそこへいきたかった。公園に着くと誰もいるはずのないブランコに人影が見えた…

第九章 月明かり

ぼくはブランコに近づいた。少し怖かったからゆっくりと…。

そこには…誰も居なかった。ぼくの目の錯覚だったらしい…ぼくは安心したようなそうでもないような気持ちになった。心のどこかで何かを期待してたのかもしれない…

「はあ…」

ぼくはブランコに腰掛けてため息をついた。そして空を見上げた。星がとても綺麗で輝いていて涙がでそうになった。なんだか世界中にぼく1人しかないみたい…

そんなことを思っていた…。

「ハックシュッ」

突然どこからか、くしゃみが聞こえた。ぼくは、そのくしゃみがした方へ振り向いた。例の可愛らしい木の机の後ろから長い髪の一部が少しだけ見えた。その髪は風と絡まり合って遊んでいた。

「だれっ!？」

ぼくは驚いていて、見慣れているはずのその髪が誰の物なのか分からなかった。

「ちえっ…見つかったちゃった」

茶色い髪、月明かりに照らされてより白く見える肌。極めつけには大きな瞳

「晶…」

そう、そこには晶がいた。

「よっ!なんでこんな時間にここにいるの?」

いつもと変わらない様子の晶。晶は笑いながらぼくの方に近づいてきた。

「それはこっちの台詞だよ!晶こそなんでここににいるの?」

ぼくは夕方の苛立ちのことなどすっかり忘れてしまった。それくらい驚いてしまった。でもそれ以上に何故か胸が高鳴った…。

「うーん…まあいろいろあつてね」

苦笑しながら晶はそう言った。

「和磨はなんで？」また問われたのでぼくは夕方の出来事を思い出した。

「何故かここに來たくてたまらなかったから…そんなことより…」
ぼくは口ごもる。

「そんなことより？…何？」

晶はキョトンとしている。

「今日は…怒ってしまつてごめん！晶は何も悪くないのに…本当に悪かった。」

ぼくは晶の顔を見れずに俯いて謝った。晶はどんな表情をしているのだろう…嫌いにならないで…

「氣にしていなよ…」っ…？ぼくは顔を上げた。

「和磨は私を泣かせた人だもん！少しくらい…へ…いき…」

言いながら涙が出ている晶。あわてて手で目をこすって、平気だよっ！っという顔をした。ぼくは胸が痛んだ…。

「平気じゃないじゃん…そんなに傷つけてたなんて…ぼくはどうしたら…」

ぼくはうろたえた。

「違うの…」

「えっ？」

「傷ついて泣いてるんじゃないの…」

「じゃあ…何で？」

「嬉しくて…」

…？良く分かんない…晶は何が嬉しいんだ？こんな奴前にして…ああ自分で言っというて情けない。

「和磨が…和磨が私のこと嫌じゃないみたいで…それが嬉しくて…」
そういうとしゃがみ込んでまた泣き出してしまった。ぼくはそう言った晶を見て肩が軽くなった気がした。

「晶…顔上げてよ」

「えっ？」

顔を上げた晶の目が真っ赤に充血していた。

「晶はぼくのこと嫌いじゃないの？」

「そっそんなはずないじゃん！」晶はとんでもないと言わんばかりの顔で言った。

ふう：

「ぼくも：晶に嫌われないか心配だったんだ：でも良かった。そうじゃないみたい」

ぼくは笑いながらしゃがみ込んで、晶と目線を合わせた。涙で濡れた頬をぼくはコートの袖でぬぐってやった。

「あはっ」

「あははっ」

自然とこぼれる笑み。ぼくらは月明かりの下で笑い合った。

そして僕らは暗闇の中、手をつないで僕らのアパートへ帰った。

ねえ：あの時ぼくはきつと君に会いたくて：会いたくてたまらなくて：あそこへ行ったんだよ。

君はどんな気持ちでここに来たの？

第九章 月明かり（後書き）

読んで下さっている皆様大変長らくお待たせしてしまい、申し訳ありませんでしたm（――）m次回は少し急展開するつもりです（^へ^;）もし時間があればで宜しいのですが、できれば目を通してやって下さいm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704a/>

幼恋

2010年12月30日14時21分発行